英文解釈 L01 第 14 講 節の形から that・if・what を読み分ける

学習目標

指定された節の文中での役割・内部構造・必要な文脈を根拠に、that・if・what の読みを判断できる。また、節と主節の意味関係を保ち、英文全体を自然な日本語に訳せる。

that 節の外側の役割と内側の形

英文を読むとき、that という語を見つけただけでは、その後ろのまとまりがどのような働きをするかは決まらない。

既習の that 名詞節は、節全体が名詞のように働き、主節の主語・目的語・補語などになる。一方、関係代名詞 that が導く関係節は、先行詞となる名詞を説明する。

この違いを見抜くには、**節の外側で何につながるか**と、**節の内側で that がどのような役割を持つか**を分けて考える必要がある。

名詞として主節に入る that 節

まず、次の英文を読もう。

語注：guide「案内人」／stop at ～「～に停車する」

The guide knows that the train stops at this station.

日本語の意味

その案内人は、その列車がこの駅に停車することを知っている。

読み方の解説

文の中心は、主語の The guide と動詞の knows である。knows は「何を知っているのか」という内容を目的語として取る動詞だ。

ここでは、that the train stops at this station という節全体が knows の目的語になっている。つまり、that 以下の内容が案内人の知っていることである。

次に節の内部を見ると、the train が主語、stops が動詞で、at this station が停車する場所を表している。列車が駅に停車するという内容が、節の内部で成立している。

この that は名詞節を導く接続詞であり、**that 自体が節内部の主語や目的語になるわけではない**。節全体が主節の目的語になることと、that という語が節内部で役割を持つことは別の問題である。

先行詞を説明する that 関係節

今度は、同じ列車と駅を使った別の英文を見てみよう。

語注：leave「（乗り物が）出発する」／at noon「正午に」

The train that stops at this station leaves at noon.

日本語の意味

この駅に停車するその列車は、正午に出発する。

©ミライコーチング

読み方の解説

主節の主語全体は The train that stops at this station であり、The train はその中心となる名詞である。that stops at this station という関係節が The train を限定し、関係節を含む名詞句全体が主節の主語を構成する。主節では leaves が動詞、at noon が出発時刻を表す。文全体では、その列車が正午に出発することを述べている。

では、that stops at this station は何をしているのだろうか。

このまとまりは、直前の名詞 The train を説明している。「どの列車なのか」を示し、この駅に停車する列車だと対象を限定している。

さらに、関係節の内部を見ると、動詞 stops の主語に当たる役割を関係代名詞 that が担っている。この that は、先行詞の the train を受けているため、「その列車がこの駅に停車する」という関係が成立する。

つまり、**関係代名詞 that には節内部での役割があり、その役割が先行詞と結び付いている**。先ほどの接続詞 that との重要な違いはここにある。

外側と内側を往復して判断する

2 つの英文は、どちらも that を含むが、構造上の働きは異なる。

最初の英文では、that 以下の節全体が knows の目的語になっていた。節内部の主語は the train であり、接続詞 that に主語や目的語の役割を割り当てる必要はない。

一方、2 つ目の英文では、that 以下の関係節が名詞 the train を修飾していた。そして、関係代名詞 that 自身が stops の主語に当たる役割を持ち、先行詞と対応していた。

「that の後ろが完全な文なら名詞節、不完全なら関係節」という見方は、基本形を見分ける手がかりにはなる。しかし、その言葉だけを覚えても、なぜそう判断できるのかは説明できない。

大切なのは、実際の動詞がどのような要素を必要とするか、先行詞となる名詞があるか、そして節全体が主節の中でどのような働きをしているかを確かめることだ。

節全体が主節の要素になるのか、それとも先行詞を説明するのか。 まず外側の関係をつかみ、次に節内部の主語・動詞・必要な要素を確認する。この順序で読めば、that という語の見た目に頼らず、構造を根拠に意味を組み立てられる。

構文図では、S は主語、V は動詞、O は目的語、C は補語、M は修飾語を表す。main は主節を中心とした文の外側の構造、inner は従属節の内部構造を示す。語句や節のまとまりは、名詞として働く部分を〈 〉、形容詞として働く部分を〔 〕、副詞として働く部分を( )で示し、V には下線を付ける。なお、M という表示は、その語句や節を必ず省略できるという意味ではない。

〈The guide〉 knows 〈that the train stops at this station〉.
S V O

S “The guide” / 主節の主語
V “knows” / 主節の動詞
O “that the train stops at this station” / 主節の目的語 / that 節全体が knows の目的語となる。接続詞 that 自体は節内部の主語や目的語ではない。

The guide knows 〈that 〈the train〉 stops (at 〈this station〉)〉.
S V M

S “the train” / that 節内部の主語
V “stops” / that 節内部の動詞
M “at this station” / 停車する場所 / stops に結び付く場所の表現。M 表示は省略可能であることを意味しない。

〈〈The train〉〔that stops (at 〈this station〉)〕〉 leaves (at noon).
S V M

S “The train that stops at this station” / 主節の主語全体 / 中心名詞は train。that stops at this station が先行詞 The train を限定し、関係節を含む名詞句全体が主語となる。
V “leaves” / 主節の動詞
M “at noon” / 出発時刻 / at noon は leaves に結び付く時の表現。

〈The train〉〔that stops (at 〈this station〉)〕 leaves at noon.
S V M

S “that” / 関係節内部の主語 / 関係代名詞 that が stops の主語を担い、先行詞 The train に対応する。
V “stops” / 関係節内部の動詞
M “at this station” / 停車する場所 / at this station は stops に結び付く場所の表現。

if 節が内容か条件かを読む

if には「もし〜なら」という条件を表す働きだけでなく、「〜かどうか」という疑問の内容を表す働きもある。

どちらの if 節にも主語と動詞があるため、後ろの語順だけで区別することはできない。判断の手がかりになるのは、**if 節全体が主節の中でどのような働きをしているか**という点である。

疑問の内容を表す if 名詞節

まず、次の英文を読もう。

語注：school library「学校の図書館」／open early「早い時刻に開く（ここでは通常より早く開く読みを採用する。early 自体は早い時刻を表すが、通常時刻より前かどうかは文脈による）」

The students do not know if the school library will open early tomorrow morning.

日本語の意味

生徒たちは、学校の図書館が明日の朝、通常より早く開くかどうかを知らない。

読み方の解説

主節の中心は、The students が主語で、do not know が否定の述語になっている。「生徒たちは知らない」という内容だが、何を知らないのかを確かめる必要がある。

その内容を表しているのが、if the school library will open early tomorrow morning という節全体である。この if 節は know の目的語として働く名詞節で、「図書館が早く開くかどうか」という疑問の内容を示している。

節の内部では、the school library が主語、will open が未来のことを表す述語である。if は名詞節を導く接続詞であり、それ自体が節内部の主語や目的語を担っているわけではない。

ここで注意したいのは、**否定されているのは生徒たちが知っているということであって、図書館が開くことではない**という点だ。図書館が実際に早く開くかどうかは、この英文だけでは分からない。

また、この if 節は未来の出来事についての疑問内容を表しているため、will open が使われている。「if の後ろには必ず現在形を置く」と覚えてしまうと、この構造を正しく読めなくなる。

条件を表す if 副詞節

次は、図書館が早く開く場合に、生徒たちがどうするかを述べた英文である。

語注：open early「早い時刻に開く（ここでは通常より早く開く読みを採用する。early 自体は早い時刻を表すが、通常時刻より前かどうかは文脈による）」／before class「授業前に」

If the school library opens early tomorrow morning, the students will study there before class.

日本語の意味

もし学校の図書館が明日の朝、通常より早く開けば、生徒たちは授業前にそこで勉強するだろう。

読み方の解説

この英文の主節は、the students will study there before class である。the students が主語、will study が述語で、「生徒たちは授業前にそこで勉強するだろう」という内容を表している。there は学校の図書館を指す。

文頭の If the school library opens early tomorrow morning は、主節の出来事がどのような条件で起こるかを示す副詞節である。

ここでは、if 節全体が主節の目的語になるのではない。「図書館が通常より早く開く」という条件が満たされた場合に、「生徒たちは授業前にそこで勉強する」という関係になっている。

節の内部を見ると、the school library が主語、opens が動詞である。条件を導く接続詞 if 自身に、節内部の主語や目的語の役割を割り当てる必要はない。

また、この英文は未来の出来事について述べているが、条件節では will open ではなく opens という現在形を使っている。未来のことを表す時・条件の副詞節では、通常、未来の内容を現在形で表すという既習の規則が当てはまる。

ただし、現在形の opens を見ただけで条件節だと決めるのではない。**if 節が主節に条件を付けていることを確認したうえで、その中の時制を読む**ことが重要だ。

この英文は条件が成り立つ場合の予定や見通しを述べており、図書館が実際に早く開くことや、生徒たちが必ず勉強することまで断定しているわけではない。

主節との関係から読み分ける

最初の英文では、if 節全体が do not know の目的語となり、生徒たちが知らない内容を表していた。

一方、2 つ目の英文では、if 節全体が主節に条件を加え、生徒たちが勉強するのはどのような場合かを示していた。

したがって、if 節を読むときは、まず主節の述語とその意味を確認する。そのうえで、if 節が主節の動詞に必要な疑問内容なのか、それとも主節の出来事が成立する条件なのかを判断する。

「〜かどうか」と「もし〜なら」の違いは、if という語だけで決まるのではない。**節の外側での働きと主節との意味関係を確かめること**が、正確な読み分けにつながる。

〈The students〉 do not know
S V M V

〈if the school library will open early tomorrow morning〉.
O

S “The students” / 主節の主語
V “do” / 否定文を作る do
M “not” / 主節の否定 / not は know を含む主節の述語を否定する。図書館が開かないという意味ではない。
V “know” / 主節の動詞
O “if the school library will open early tomorrow morning” / 主節の目的語 / if 節全体が know の目的語となり、生徒たちが知らない疑問内容を表す。接続詞 if 自体は節内部の主語や目的語ではない。

The students do not know 〈if 〈the school library〉 will open early
S V M

(tomorrow morning)〉.
M

S “the school library” / if 節内部の主語
V “will open” / if 節内部の述語 / will open は未来の開館を表す。疑問内容を表す名詞節なので、未来の内容に will を使える。
M “early” / 開く時刻の早さ / early は早い時刻を表す。本文では通常より早く開く読みを採用するが、通常時刻より前かは文脈による。
M “tomorrow morning” / 開く時 / tomorrow morning は開館する時を示す。

(If the school library opens early tomorrow morning), 〈the students〉 will study there
M S V M

(before class).
M

M “If the school library opens early tomorrow morning” / 主節にかかる条件節 / if 節全体が主節の出来事に条件を加える。条件の成立や勉強する行動の実現は、この文だけでは断定されない。
S “the students” / 主節の主語
V “will study” / 主節の述語 / will study は条件が満たされた場合の未来の行動を表す。
M “there” / 勉強する場所 / there は学校の図書館を指す。
M “before class” / 勉強する時 / before class は授業前を表す。

(If 〈the school library〉 opens early (tomorrow morning)), the students will study
S V M M

there before class.

S “the school library” / if 節内部の主語
V “opens” / if 節内部の動詞 / opens は現在形。ここでは未来の条件を現在形で表しているが、条件節という判断は主節との意味関係に基づく。
M “early” / 開く時刻の早さ / early は早い時刻を表す。本文では通常より早く開く読みを採用するが、通常の開館時刻より前かどうかは文脈による。
M “tomorrow morning” / 開く時 / tomorrow morning は図書館が開く時を示す。

what 節が表すもの・ことを読む

これまで学んだ what 節は、「何を〜するか」「何が〜なのか」という疑問の内容を表すものだった。

しかし、what には、**「〜するもの・こと」という意味を含み、関係代名詞として働く用法**もある。これは先行詞を含む関係代名詞 what と呼ばれる。

通常の関係代名詞は、前にある名詞を先行詞として受ける。一方、この what は、外側に別の先行詞を置かず、what 節全体で「〜するもの・こと」を表す。

読み取るには、what 節全体が文中でどのような役割を持つかと、what 自身が節内部でどのような役割を持つかを分けて考える。

目的語として働く what 節

まず、夕食の買い物について述べた英文を見てみよう。

語注：market「市場」／need 〜 for dinner「夕食のために〜を必要とする」

At the market, Yuki bought what her mother needed for dinner.

日本語の意味

ユキは市場で、母親が夕食のために必要としていたものを買った。

読み方の解説

主節の中心は、Yuki が主語で、bought が動詞である。At the market は、ユキが買い物をした場所を表している。

bought は「〜を買った」という意味で、この文では「何を買ったのか」に当たる目的語が続いている。それが what her mother needed for dinner という節全体だ。

次に節の内部を確認する。her mother が主語、needed が動詞であり、what が needed の目的語に当たる役割を担っている。ここでは her が Yuki を指すと読むのが自然だが、文脈によっては別の女性を指す可能性もあり、原文だけから Yuki との同一参照が必須とはいえない。

つまり、**what 節全体は主節の bought の目的語であり、what 自身は節内部の needed の目的語に当たる**。この 2 つの役割を区別することが重要だ。

この場面では、bought という動詞が、買った対象を表す名詞的なまとまりを必要としている。そこで、what 節を「母親が必要としていたもの」と読み、買った対象として主節につなげる。

ここでの what は、前にある別の名詞を受けているわけではない。what 自体に「〜するもの」という意味が含まれているため、原文に存在しない先行詞を外側へ補う必要はない。

主語として働く what 節

次は、子どもたちが庭に植えたものがよく育ったことを述べた英文である。

語注：plant「植える」／grow well「よく育つ」

What the children planted in the garden grew well.

日本語の意味

子どもたちが庭に植えたものは、よく育った。

読み方の解説

この英文では、What the children planted in the garden という節全体が、主節の主語になっている。

主節の動詞は grew で、well が育ち方を説明している。「何がよく育ったのか」を表すのが、文頭の what 節全体である。

節の内部では、the children が主語、planted が動詞だ。planted は「〜を植えた」という意味なので、what が「植えた対象」に当たる目的語の役割を担っている。

したがって、**what 節全体は主節の主語、what 自身は節内部の planted の目的語に当たる。**

この文で主節の動詞 grew が述べているのは、植えられたものが育ったということである。「何を植えたか」という疑問そのものが育ったのではない。主節の述語との意味関係から、「子どもたちが植えたもの」という読みが自然だと判断できる。

what 節の構造と文脈を合わせて読む

ここまでの 2 文では、どちらの what も節内部で動詞の目的語に当たる役割を持っていた。しかし、what 節全体の外側での働きは異なる。最初の文では bought の目的語、2 つ目の文では grew の主語だった。

ただし、**節内部で目的語に当たる要素がないように見えることだけで、先行詞を含む what だと決められるわけではない。**既習の疑問内容を表す what も、節内部で主語や目的語などの役割を持つことがある。

そのため、what 節が名詞として働くことや、節内部の動詞に目的語が必要なことだけでは、2 つの読みを常に区別できるとは限らない。

今回の英文では、買う対象や育つ対象について述べているという文脈と、bought・grew という主節の動詞の意味を合わせることで、「〜するもの」という読みを採用できる。

what 節を読むときは、節全体の文中での役割を確かめ、what 自身の節内部での役割を確認する。そのうえで、主節の述語と文脈に合う意味を選ぶことが大切だ。

(At 〈the market〉), Yuki bought 〈what her mother needed for dinner〉.
M　S　V　O

M “At the market” / 買い物をした場所 / At the market は bought に結び付く場所の表現。
S “Yuki” / 主節の主語
V “bought” / 主節の動詞
O “what her mother needed for dinner” / 主節の目的語 / what 節全体が bought の目的語となり、ユキが買った対象を表す。

At the market, Yuki bought 〈what 〈her mother〉 needed (for dinner)〉.
O　S　V　M

O “what” / what 節内部の目的語 / what は needed の目的語に当たる。夕食の買い物という文脈と主節の bought から、ここでは「必要としていたもの」と読む。外部に別の先行詞はない。疑問内容の what も目的語になり得るため、構造だけでは読みを決められない。
S “her mother” / what 節内部の主語 / her はここでは Yuki を指すと読むが、別の女性を指す可能性も文脈次第で残る。
V “needed” / what 節内部の動詞
M “for dinner” / 必要とする目的 / for dinner は needed に結び付き、夕食のために必要としていたことを表す。

〈What the children planted in the garden〉 grew well .
S　V　M

S “What the children planted in the garden” / 主節の主語全体 / what 節全体が主節の主語。「子どもたちが植えたもの」という読みを採用する。grew が表すのは植えた対象の生育であり、子どもたちがその後世話をしたことまでは述べていない。
V “grew” / 主節の動詞
M “well” / 育ち方 / well は grew を修飾し、よく育ったことを表す。

©ミライコーチング

〈What 〈the children〉 planted (in 〈the garden〉)〉 grew well.
O S V M

O “What” / what 節内部の目的語 / What は planted の目的語に当たる。主節の grew と植えた対象の生育という文脈から、ここでは「植えたもの」と読む。外側に別の先行詞はない。疑問内容の what も目的語になり得るため、構造だけで読みを一意に決めない。
S “the children” / what 節内部の主語
V “planted” / what 節内部の動詞
M “in the garden” / 植えた場所 / in the garden は planted に結び付き、植えた場所を示す。

what の構造と文脈を合わせて読む

what 節には、「何を〜するか」という疑問の内容を表すものと、「〜するもの・こと」を表すものがある。

ここで注意したいのは、**どちらの what も節内部で主語や目的語などの役割を持ち得る**という点だ。節内部の動詞に目的語が見当たらないからといって、必ず先行詞を含む関係代名詞 what になるわけではない。

そこで、what 以下の形をそろえ、主節の動詞と文脈を変えた 2 つの英文を比べてみよう。

疑問の内容を表す what 節

授業を欠席したミカが、あとから授業の配布物について質問した場面を考える。

語注：ask「尋ねる」／hand out 〜「〜を配る」／in class「授業中に」

Mika asked what the teacher handed out in class.

日本語の意味

ミカは、先生が授業中に何を配ったのか尋ねた。

読み方の解説

主節の中心は、Mika が主語、asked が動詞である。asked は、この文では「尋ねた」という意味で、後ろに尋ねた内容が続いている。

what the teacher handed out in class という節全体が、その疑問内容を表している。「先生が授業中に何を配ったのか」が、ミカの尋ねたことである。

節の内部では、the teacher が主語、handed out が動詞のまとまりで、what が配られた対象、つまり目的語に当たる。

この文では、**what 節全体は asked の目的語となり、what 自身は handed out の目的語に当たる。**

ここでの what は「何を」という疑問を表している。asked という主節の動詞と、配布物について質問している文脈が、この読みを支えている。

なお、この英文はミカが質問したことを述べているだけで、先生が何を配ったのかという答えまでは示していない。

先行詞を含む what 節

今度は、授業に参加したミカが、配布されたものを捨てずに手元に残した場面を考える。

語注：keep（過去形 kept）「取っておく」／hand out 〜「〜を配る」

Mika kept what the teacher handed out in class.

日本語の意味

ミカは、先生が授業中に配ったものを取っておいた。

読み方の解説

主節の中心は、Mika が主語、kept が動詞である。kept はここでは「取っておいた」という意味で、何を取っておいたのかを示す目的語が必要になる。

その目的語が、what the teacher handed out in class という節全体だ。

節内部の構造は、先ほどの英文と同じである。the teacher が主語、handed out が動詞のまとまりで、what が配られた対象に当たる。

違いは、主節との意味関係にある。

今回は kept という動詞が、手元に残した対象を表している。授業で配られたものを保管するという文脈にも合うため、what 節を「先生が授業中に配ったもの」と読む。

つまり、**what 節全体は kept の目的語であり、what 自身は handed out の目的語に当たる。**

この what は「〜するもの」という意味を含む関係代名詞である。別の先行詞が節の外側にあるわけではなく、what 節全体で取っておいた対象を表している。

同じ内部構造でも読みが変わる理由

2 つの英文では、what the teacher handed out in class という部分がまったく同じ形で使われている。

どちらも what 節全体が主節の目的語になり、節内部では what が handed out の目的語に当たる。したがって、節の外側と内側の文法上の役割を確認するだけでは、この 2 つを区別できない。

違いを生むのは、主節の述語と文脈である。

最初の asked は、何を配ったのかという疑問内容を受けている。一方、2 つ目の kept は、実際に配られたものを取っておくという意味で使われている。

このように、**構造から節の役割を確認したうえで、主節の動詞が求める意味と文脈を照らし合わせる**ことで、適切な読みを判断する。

ただし、どの英文でも主節の動詞だけで読みが一意に決まるわけではない。文脈によっては、疑問内容と「〜するもの・こと」の両方の解釈が成り立つ場合もある。

その場合は、構造だけを理由に一方を誤りとせず、前後の文脈から判断する。十分な情報がなければ、複数の妥当な読みを認める必要がある。

Mika asked 〈what the teacher handed out in class〉.
S V O

S “Mika” / 主節の主語
V “asked” / 主節の動詞 / asked は過去形で、ミカが尋ねたことを表す。
O “what the teacher handed out in class” / 主節の目的語 / what 節全体が asked の目的語となる。質問している場面と asked の意味から、ここでは「何を配ったのか」という疑問内容として読む。

Mika asked 〈what 〈the teacher〉 handed out (in class)〉.
O S V M

O “what” / what 節内部の目的語 / what は handed out の目的語に当たり、配られた対象を尋ねている。疑問内容の what も先行詞を含む what も内部で目的語になり得るため、この役割だけで読みは決まらない。
S “the teacher” / what 節内部の主語
V “handed out” / what 節内部の述語 / handed out は「配った」という意味の句動詞で、過去の行為を表す。
M “in class” / 配った場面 / in class は授業中に配ったことを表す。

Mika kept 〈what the teacher handed out in class〉.
S V O

S “Mika” / 主節の主語
V “kept” / 主節の動詞 / kept は過去形で、ミカが配布物を手元に残したことを表す。
O “what the teacher handed out in class” / 主節の目的語 / what 節全体が kept の目的語となる。配布物を取っておく場面と kept の意味から、ここでは「先生が配ったもの」と読む。

Mika kept 〈what 〈the teacher〉 handed out (in class)〉.
O S V M

O “what” / what 節内部の目的語 / what は handed out の目的語に当たる。ここでは「配ったもの」と読むが、疑問内容の what も目的語になり得るため、内部構造だけでは区別できない。外側に別の先行詞はない。
S “the teacher” / what 節内部の主語
V “handed out” / what 節内部の述語 / handed out は「配った」という意味の句動詞で、過去の行為を表す。
M “in class” / 配った場面 / in class は授業中に配ったことを表す。

1

場面：校長が校内施設の利用について説明している。

語注：principal「校長」／remain closed「閉まったままである」／broken heater「故障した暖房器具」

The school principal explained that the library will remain closed until Friday because of a broken heater.

- **a.** that the library will remain closed until Friday because of a broken heater という節は、文全体でどのような役割を果たしているか。主節とのつながりと節内部の構造を根拠に示せ。
- **b.** 英文全体を、構造と意味関係を保って自然な日本語に訳せ。

例題 1 の解説

a. that 節の役割と判断根拠

指定された that 節は、**主節の動詞 explained の目的語に当たる名詞節**である。

まず、主節の中心を確認すると、The school principal が主語、explained が動詞である。explained は「説明した」という意味で、何を説明したのかという内容が後ろに続いている。

その説明内容が、that the library will remain closed until Friday because of a broken heater という節全体である。

節の内部では、the library が主語、will remain が述語の中心で、closed が図書室の状態を表している。until Friday はその状態が続く期間の終わりを示し、because of a broken heater は理由を表している。

この that は名詞節を導く接続詞であり、節内部の主語や目的語にはなっていない。

関係代名詞 that であれば、先行詞となる名詞を説明し、that 自身が関係節内部で主語や目的語などの役割を担う。しかし、この文では that の前に修飾対象となる先行詞はなく、節内部も the library を主語として必要な要素がそろっている。

したがって、that 以下を「校長が説明した内容」として一まとまりに捉えるのが適切である。

b. 全文和訳

直訳

その学校の校長は、故障した暖房器具のために、図書室が金曜日まで閉まったままになるということを説明した。

満点の訳

校長は、暖房器具が故障しているため、図書室は金曜日まで閉まったままになると説明した。

訳し方の解説

英文の explained は過去形なので、校長が説明したのは過去の出来事である。一方、that 節内部の will remain closed は、図書室がこれからも閉まった状態にあることを表している。

訳す際には、この 2 つの時間関係を混同しない。「説明した」と「閉まったままになる」を組み合わせれば、主節の過去と that 節の未来の内容を保てる。

また、because of a broken heater は、この解説では図書室が閉まったままである理由を表すと読む。自然な日本語にするため、「故障した暖房器具のために」を「暖房器具が故障しているため」と整えても、採用した読みの意味は変わらない。ただし、文脈によっては主節の explained に結び付き、校長が説明した理由を表す読みも可能である。

最後に、until Friday は閉まった状態が続く期間を示している。金曜日に必ず再開するという情報までは加えない。

別の英文でも、that を見つけたら、まず主節の動詞がどのような内容を必要としているかを確認する。次に that 節内部の主語・述語と必要な要素を調べ、先行詞を説明しているのか、節全体が主節の要素になっているのかを判断するとよい。

〈The school principal〉 explained
S V

〈that the library will remain closed until Friday because of a broken heater〉.
O

S “The school principal” / 主節の主語
V “explained” / 主節の動詞 / explained は過去形で、校長が説明したという過去の行為を表す。
O “that the library will remain closed until Friday because of a broken heater” / 主節の目的語 / that 節全体が explained の目的語となり、説明した内容を表す。接続詞 that 自体は節内部の主語や目的語ではない。

The school principal explained 〈that 〈the library〉 will remain closed (until Friday)
S V C M

(because of 〈a broken heater〉)〉.
M

S “the library” / that 節内部の主語

V “will remain” / that 節内部の述語 / will remain は未来の状態の継続を表す。主節の explained は過去形であり、両者の時間関係を区別する。
C “closed” / 主語の状態を表す補語 / closed は the library の閉まった状態を表す。
M “until Friday” / 状態が続く期間の終わり / until Friday は閉まった状態が続く期間の終わりを示す。金曜日に必ず再開することまでは保証しない。
M “because of a broken heater” / 閉鎖状態の理由 / 本文では閉まった状態が続く理由として読む。文脈によっては主節の explained に結び付き、説明した理由を表す読みも可能である。

2

場面：雨の影響が心配されている屋外コンサートについて、担当者が今後の予定を伝えている。

語注：rain「雨」／outdoor concert「屋外コンサート」／as scheduled「予定どおり」

If the rain stops before noon tomorrow, the outdoor concert will begin at 2 p.m. as scheduled.

- **a.** If the rain stops before noon tomorrow という節は、文全体でどのような役割を果たしているか。主節との意味関係と構造上の根拠を示せ。
- **b.** 英文全体を、構造と意味関係を保って自然な日本語に訳せ。

例題 2 の解説

a. if 節の役割と判断根拠

指定された if 節は、**主節の出来事が成立する条件を表す副詞節**である。

まず、主節は the outdoor concert will begin at 2 p.m. as scheduled である。the outdoor concert が主語、will begin が述語の中心で、コンサートが予定どおり午後 2 時に始まるという未来の内容を表している。

この主節に対して、If the rain stops before noon tomorrow という節は、「明日の正午前に雨がやむ」という条件を加えている。

節の内部では、the rain が主語、stops が動詞である。if は条件を導く接続詞であり、それ自体が節内部の主語や目的語を担っているわけではない。

ここで注目したいのは、主節の動詞 begin の働きだ。begin はこの文では「始まる」という意味で使われており、後ろに「〜かどうか」という疑問内容を目的語として必要としていない。

既習の if 名詞節なら、know や ask などの動詞に続き、知っている内容や尋ねる内容を表すことがある。しかし、この英文では、if 節が主節の動詞の目的語になっているのではなく、コンサートが始まる条件を示している。

また、if 節には tomorrow という未来の時を表す語があるが、動詞は stops という現在形になっている。未来のことを表す条件の副詞節では、通常、未来の内容を現在形で表すという既習の規則に合っている。

ただし、**現在形だから条件節と決めるのではなく、主節との条件関係を確認したうえで時制を読む**ことが重要だ。

b. 全文和訳

直訳

もし明日の正午より前に雨がやむなら、屋外コンサートは予定されているとおり午後 2 時に始まるだろう。

満点の訳

明日の正午前に雨がやめば、屋外コンサートは予定どおり午後 2 時に始まるだろう。

訳し方の解説

この英文では、if 節の内容が主節の出来事に対する条件となっている。そのため、「雨がやめば、コンサートが始まる」という関係を保って訳す必要がある。

stops は現在形だが、tomorrow があるため、明日のことを述べている。一方、主節の will begin は未来の出来事を表す。「雨がやんだので、コンサートが始まった」と過去の事実に変えてはいけない。

また、will begin は条件が満たされた場合の未来の出来事を述べている。雨が実際にやむことや、コンサートがすでに開催されたことまで断定しているわけではない。

before noon tomorrow は「明日の正午前に」であり、雨がやむ時点についての条件を限定している。at 2 p.m.はコンサートの開始時刻、as scheduled はその開始が予定どおりであることを表す。それぞれの情報を落とさず、自然な日本語に整える。

別の英文でも、if 節を見つけたら、まず主節の述語が疑問内容を必要としているのか、それとも if 節が主節の出来事に条件を加えているのかを確認するとよい。**主節の動詞の働きと節同士の意味関係を根拠に判断すること**が、読み分けの基本となる。

(If the rain stops before noon tomorrow) M , 〈the outdoor concert〉 S <u>will begin</u> V (at 2 p.m.) M

(as scheduled) M .

M “If the rain stops before noon tomorrow” / 主節にかかる条件節 / if 節全体がコンサートの開始に条件を加える。雨がやんだことやコンサートが実際に開催されたことは断定しない。
S “the outdoor concert” / 主節の主語
V “will begin” / 主節の述語 / will begin は条件が満たされた場合の未来の開始を表す。
M “at 2 p.m.” / 開始時刻 / at 2 p.m.は午後 2 時を表す。p.m.のピリオドは略語の一部である。
M “as scheduled” / 予定との一致 / as scheduled は予定どおりに始まることを表す。

(If 〈the rain〉 S <u>stops</u> V (before noon tomorrow)) M , the outdoor concert will begin at 2 p.m. as scheduled.

S “the rain” / if 節内部の主語
V “stops” / if 節内部の動詞 / stops は現在形。未来の条件節で現在形を使っているが、条件節という判断は主節との意味関係に基づく。
M “before noon tomorrow” / 雨がやむ時 / before noon tomorrow は明日の正午前を表す。条件の成立自体は断定していない。

3

場面：学校の催しに設けられた食品の販売コーナーでの出来事。

語注：school fair「学校の催し」／sell（過去形 sold）「売る」／bake（過去形 baked）「（パンや菓子などを）焼く」

At the school fair, Aki sold what she baked that morning.

- **a.** what she baked that morning という節は、文全体でどのような役割を果たしているか。節内部の構造と主節の動詞・文脈を根拠に、その読みを判断した理由を示せ。
- **b.** 英文全体を、構造と意味関係を保って自然な日本語に訳せ。

例題 3 の解説

a. what 節の役割と判断根拠

指定された what she baked that morning は、**主節の動詞 sold の目的語として働く名詞節**である。この文では、先行詞を含む関係代名詞 what によって「その朝に焼いたもの」を表している。

まず、主節の中心は Aki sold である。Aki が主語、sold が動詞で、「アキが売った」という過去の出来事を述べている。

この文の sold は「〜を売った」という他動詞用法で、売った対象を表す目的語を取っている。その役割を果たしているのが what 節全体である。

次に、節の内部を見ると、she が主語、baked が動詞である。ここでは she が Aki を指すと読むのが自然だが、文脈によっては別の女性を指す可能性もあり、原文だけから Aki との同一参照が必須とはいえない。that morning は焼いた時を表している。

ここで what 自身は、baked の目的語に当たる。つまり、「アキがその朝に何かを焼いた」という関係の中で、焼いた対象を表している。

したがって、**what 節全体は sold の目的語であり、what 自身は baked の目的語に当たる**。この 2 つの役割を区別することが重要だ。

さらに、主節の sold は、実際に売った対象を必要としている。学校の催しで食品を販売しているという文脈にも合うため、この what 節は「アキがその朝に焼いたもの」と読むのが自然である。

疑問内容を表す what も節内部で目的語になることがあるため、目的語に当たる語が見当たらないという理由だけでは区別できない。この英文では、**売る対象を表すという主節との意味関係**が判断の根拠になる。

また、関係代名詞 what は先行詞の意味を自身に含んでいる。原文に存在しない別の先行詞を節の外側へ補う必要はない。

b. 全文和訳

直訳

学校の催しで、アキは、その朝に自分が焼いたものを売った。

満点の訳

アキは学校の催しで、その朝に自分で焼いたものを売った。

訳し方の解説

主節の sold は過去形なので、アキが売ったという出来事を過去のこととして訳す。また、what 節内部の baked も過去形であり、アキがその朝に焼いたことを表している。

what she baked that morning は「その朝に自分が焼いたもの」という一まとまりになる。このまとまりを sold の目的語としてつなぐことで、何を売ったのかが明確になる。

At the school fair は売った場所・場面を、that morning は焼いた時を示している。日本語の語順を整えても、それぞれが説明する出来事を取り違えないようにする。

また、baked からは焼いたものの具体的な種類や数量までは分からない。「クッキーを何枚か売った」など、原文にない情報は付け加えない。

別の英文でも、what 節全体が主節のどの要素になるかを確認し、次に what 自身が節内部で担う役割を調べる。そのうえで、主節の動詞の意味と文脈を照らし合わせれば、「何を〜するか」と「〜するもの・こと」のどちらを採用するか判断しやすくなる。

ただし、文脈によって両方の読みが成立する場合もあるため、構造だけで一方を機械的に排除しないことが大切だ。

(At 〈the school fair〉), Aki sold 〈what she baked that morning〉.
M　S　V　O

M “At the school fair” / 売った場面 / At the school fair は Aki が販売した場面を表す。
S “Aki” / 主節の主語
V “sold” / 主節の動詞 / sold は過去形。この文では売った対象を目的語に取る他動詞用法であり、sell のすべての用法で目的語が必須という意味ではない。
O “what she baked that morning” / 主節の目的語 / what 節全体が sold の目的語。食品販売という場面と主節の動詞から、ここでは「その朝に焼いたもの」を売ったと読む。

At the school fair, Aki sold 〈what she baked (that morning)〉.
O　S　V　M

O “what” / what 節内部の目的語 / what は baked の目的語に当たる。ここでは販売対象を表す「焼いたもの」と読む。外側に別の先行詞はない。疑問内容の what も目的語になり得るため、内部構造だけでは読みを決められない。
S “she” / what 節内部の主語 / she は本文では Aki を指すと読むが、文脈によっては別の女性を指す可能性もある。
V “baked” / what 節内部の動詞 / baked は過去形で、焼いたという行為を表す。焼いたものの具体的な種類や数量は示されていない。
M “that morning” / 焼いた時 / that morning は baked に結び付き、その朝に焼いたことを表す。

演習問題

1

場面：コーチが、翌朝の練習予定をチームに伝えている。

語注：announce「発表する」／practice indoors「屋内で練習する」／because of 〜「〜のために」

The coach announced that the team will practice indoors tomorrow morning because of the rain.

a. that the team will practice indoors tomorrow morning because of the rain という節は、文全体でどのような役割を果たしているか。主節とのつながりと節内部の構造を根拠に示せ。

b. 英文全体を、構造と意味関係を保って自然な日本語に訳せ。

2

場面：月曜日の朝、エミが学校に持ってきた荷物について述べている。

語注：borrow「借りる」／school library「学校の図書館」／backpack「リュックサック」

The book that Emi borrowed from the school library was still in her backpack on Monday morning.

a. that Emi borrowed from the school library という節は、文全体でどのような役割を果たしているか。節内部の動詞の働きと、主節に含まれる名詞との関係を根拠に示せ。

b. 英文全体を、構造と意味関係を保って自然な日本語に訳せ。

3

場面：店長が、金曜日の納品予定を配送会社に確認している。

語注：store manager「店長」／check「確認する」／delivery truck「配送トラック」／before noon「正午前に」

The store manager is checking if the delivery truck will arrive before noon on Friday.

a. if the delivery truck will arrive before noon on Friday という節は、文全体でどのような役割を果たしているか。主節の動詞の働きと節内部の構造を根拠に示せ。

b. 英文全体を、構造と意味関係を保って自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

4

場面：午後の遊覧船について、運航会社が天候を確認しながら運航方針を伝えている。

語注：get stronger「強まる」／tour company「ツアー会社」／cancel「中止する」／for safety reasons「安全上の理由で」

If the wind gets stronger this afternoon, the tour company will cancel the boat trip for safety reasons.

a. If the wind gets stronger this afternoon という節は、文全体でどのような役割を果たしているか。主節との意味関係と節内部の構造を根拠に示せ。

b. 英文全体を、構造と意味関係を保って自然な日本語に訳せ。

5

場面：海岸清掃活動について記事を書くため、サラが活動の参加者に取材している。

語注：interview「インタビュー、取材」／volunteer「ボランティア」／collect「集める」／along the beach「海岸に沿って」

During the interview, Sara asked what the volunteers collected along the beach last Saturday.

a. what the volunteers collected along the beach last Saturday という節は、文全体でどのような役割を果たしているか。節内部の構造と、主節の動詞・場面との関係を根拠に示せ。

b. 英文全体を、構造と意味関係を保って自然な日本語に訳せ。

6

場面：文化祭の展示会場で、リナがクラスメートの作品展示を担当している。

語注：school festival「文化祭」／display「展示する」／paint「絵を描く」

At the school festival, Rina displayed what her classmates painted.

a. what her classmates painted という節は、文全体でどのような役割を果たしているか。what 自身の節内部での役割と、主節の動詞・場面との意味関係を根拠に示せ。

b. 英文全体を、構造と意味関係を保って自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

演習問題の解答・解説

1

a. that 節の役割と判断根拠

指定された that the team will practice indoors tomorrow morning because of the rain は、**主節の動詞 announced の目的語として働く名詞節**である。

主節では、The coach が主語、announced が動詞である。announced は「発表した」という意味で、後ろに何を発表したのかという内容が続いている。

その内容を表すのが、指定された that 節全体である。つまり、コーチが発表したのは、チームが tomorrow morning と示された明日の朝に屋内で練習するという未来の内容である。tomorrow morning は発話・報告の時間を基準とする明日の朝を示し、設定上の翌朝と一致する場合もある。

節の内部では、the team が主語、will practice が述語の中心となっている。indoors は練習する場所、tomorrow morning は練習する時を表す。

because of the rain は、ここではチームが屋内で練習する理由を示している。雨が降ることと屋内練習との関係を、理由として読み取れる。

この that は名詞節を導く接続詞であり、節内部の主語や目的語を担っていない。主語の the team と述語の will practice によって、節内部の基本的な内容が成立している。

また、that の前に関係節が修飾する先行詞はなく、that 節全体が announced の発表内容に当たる。したがって、関係代名詞 that ではなく、名詞節を導く接続詞 that と判断できる。

b. 全文和訳

直訳
コーチは、雨のためにチームが明日の朝、屋内で練習するだろうということを発表した。

満点の訳
コーチは、雨のためチームが明日の朝は屋内で練習すると発表した。

訳し方の解説
主節の announced は過去形なので、発表したという行為は過去の出来事である。一方、that 節内部の will practice は未来の練習を表している。この時間関係を混同せず、「発表した」と「明日の朝は練習する」を対応させる。

because of the rain は、採用した読みでは屋内で練習する理由を表す。「雨のために屋内で練習する」と訳すことで、理由と行為の関係が伝わる。

ただし、文法的には because of the rain を主節の announced に結び付け、「雨のためにコーチが発表した」と読む余地もある。今回の場面では屋内練習の理由と捉えるのが自然だが、文脈上成立する別の修飾関係を、形だけを理由に排除することはできない。

また、will practice は未来の内容であり、すでに練習が行われたことを意味しない。日本語では「練習すると発表した」と自然に表せるが、未来の予定について発表したという関係を保つ必要がある。

別の英文でも、that 節を見つけたら、まず主節の動詞がどのような内容を必要とするか確認し、節全体がその要素になっているかを調べる。そのうえで、節内部の主語・述語と修飾語の関係を確認すれば、that の役割を根拠に基づいて判断できる。

©ミライコーチング

〈The coach〉 announced
S V

〈that the team will practice indoors tomorrow morning because of the rain〉.
O

S “The coach” / 主節の主語
V “announced” / 主節の動詞 / announced は過去形で、コーチが発表したという過去の行為を表す。
O “that the team will practice indoors tomorrow morning because of the rain” / 主節の目的語 / that 節全体が announced の目的語となり、発表内容を表す。内容は未来の練習についてであり、接続詞 that 自体は節内部の主語や目的語ではない。

The coach announced 〈that 〈the team〉 will practice indoors (tomorrow morning)
S V M M

(because of 〈the rain〉)〉.
M

S “the team” / that 節内部の主語
V “will practice” / that 節内部の述語 / will practice は未来の練習を表す。主節の announced は過去形であり、両者の時間関係を区別する。
M “indoors” / 練習する場所 / indoors は屋内で練習することを表す。
M “tomorrow morning” / 練習する時 / tomorrow morning は発話・報告の時点を基準とする明日の朝を示す。場面設定の翌朝と一致する場合もある。
M “because of the rain” / 屋内練習の理由 / 本文では屋内で練習する理由として読む。文脈によっては主節の announced に結び付き、発表した理由を表す読みも可能である。

2

a. that 節の役割と判断根拠

指定された that Emi borrowed from the school library は、**先行詞 book を後ろから修飾する関係節**である。

まず、主節の主語は The book that Emi borrowed from the school library という名詞句全体である。その中心となる名詞は book であり、that 以下の関係節がどの本なのかを説明している。

主節の述語は was still in her backpack で、on Monday morning がその状態の時を示している。つまり、学校の図書館からエミが借りた本について、月曜日の朝にもまだリュックサックの中にあったと述べている。

次に、関係節の内部を確認する。Emi が主語、borrowed が動詞で、from the school library が借りた本の出所・借り先を表している。

borrowed は、この文では「〜を借りた」という意味で、借りた対象を必要とする。その対象に当たるのが関係代名詞 that であり、先行詞の book と対応している。

したがって、**that 自身は関係節内部で borrowed の目的語に当たり、that 以下の関係節全体は book を修飾している。**

この that は、名詞節を導く接続詞 that とは異なり、実際に節内部で目的語の役割を持つ。さらに、直前には先行詞 book があり、主節にはその本がどこにあったかを述べる述語 was が存在する。

以上から、指定された that 節は主節の目的語になる名詞節ではなく、主節の主語に含まれる名詞 book を説明する関係節だと判断できる。

b. 全文和訳

直訳
エミが学校の図書館から借りたその本は、月曜日の朝、まだ彼女のリュックサックの中にあった。

満点の訳
月曜日の朝、エミが学校の図書館から借りた本は、まだエミのリュックサックに入っていた。

訳し方の解説
まず、The book that Emi borrowed from the school library を「エミが学校の図書館から借りた本」という一まとまりで捉える。関係節は book を説明しているため、「本がエミを借りた」などと動作の主体と対象を逆転させてはいけない。

主節の was still in her backpack は、月曜日の朝の時点で、本が引き続きリュックサックの中にあったことを表す。still の「まだ」という継続の意味を落とさず、was に合わせて過去の状態として訳す。

また、borrowed も過去形であり、エミがその本を借りた出来事を表している。ただし、正確にいつ借りたかまでは示されていない。on Monday morning は、主節の本がリュックサックの中にあった時点を表している。

her は、この場面ではエミ本人を指すと読むのが自然である。そのため、満点の訳では「エミのリュックサック」として指示対象を明確にしている。ただし、英文だけを見れば、別の女性のリュックサックを指す可能性もあり、十分な文脈があればその読みも成立する。

場面にはエミが学校へ荷物を持ってきたという説明があるが、英文自体は本がリュックサックの中にあったことを述べている。「エミが本を学校へ持ってきた」といった動作を、英文に明示された内容として付け加える必要はない。

別の英文でも、名詞の後ろに that 節が続いたら、まず主節全体の骨格と名詞句の範囲を確認する。次に、関係節内部の動詞が必要とする要素と先行詞との対応を調べれば、that がどの名詞を説明しているかを判断できる。

〈〈The book〉〔that Emi borrowed (from 〈the school library〉)〕〉 was still (in 〈her backpack〉) (on 〈Monday morning〉).
S　V　M　M　M

S “The book that Emi borrowed from the school library” / 主節の主語全体 / 中心名詞は book。that Emi borrowed from the school library が The book を限定し、関係節を含む名詞句全体が主節の主語となる。
V “was” / 主節の動詞 / was は過去形で、本がリュックサックの中にあった過去の状態を表す。
M “still” / 状態の継続 / still は「まだ」を表し、本が引き続きその場所にあったことを示す。
M “in her backpack” / 本の所在 / in her backpack は本があった場所を示す。her は本文では Emi を指すと読むが、別の女性を指す可能性も文脈次第で残る。
M “on Monday morning” / 主節の状態の時 / on Monday morning は本がリュックサックの中にあった時を表す。借りた日時や学校へ持参した動作を示すものではない。

〈The book〉〔that Emi borrowed (from 〈the school library〉)〕 was still in her backpack on Monday morning.
O　S　V　M

O “that” / 関係節内部の目的語 / 関係代名詞 that は borrowed の目的語に当たり、先行詞 The book に対応する。
S “Emi” / 関係節内部の主語
V “borrowed” / 関係節内部の動詞 / borrowed は過去形で、Emi が本を借りたことを表す。

M “from the school library” / 本の借り先・出所 / from the school library は借り先・出所を表す。借りる行為が実際に図書館内で行われたことまでは断定しない。

3

a. if 節の役割と判断根拠

指定された if the delivery truck will arrive before noon on Friday は、**主節の動詞 is checking の目的語として働く名詞節**である。この if 節は「配送トラックが金曜日の正午前に到着するかどうか」という疑問の内容を表している。

主節では、The store manager が主語、is checking が述語である。is checking は「確認している」という現在進行形で、店長が何を確認しているのかという内容が後ろに続いている。

その確認内容に当たるのが、指定された if 節全体である。問題の場面でも、店長は金曜日の納品予定を配送会社に確認しているため、到着するかどうかを確かめているという読みが自然だ。

節の内部では、the delivery truck が主語、will arrive が述語である。before noon on Friday は、到着する時を「金曜日の正午前」と限定している。

arrive はここでは「到着する」という自動詞であり、目的語を必要としない。また、接続詞 if 自身が節内部の主語や目的語を担っているわけではない。

この英文の if 節は、主節の出来事が成立する条件を示しているのではない。店長が確認している内容そのものを表しているため、**条件の副詞節ではなく、疑問内容を表す名詞節**と判断できる。

なお、節内部の will arrive は未来の到着を表している。未来の条件を表す副詞節では通常現在形を使うが、この if 節は名詞節なので、その規則を当てはめて will を取り除く必要はない。

b. 全文和訳

直訳
店長は、配送トラックが金曜日の正午より前に到着するかどうかを確認している。

満点の訳
店長は、金曜日の正午前に配送トラックが着くかどうかを確認している。

訳し方の解説
主節の is checking は現在進行形であり、店長が確認している最中であることを表す。「確認した」と過去の出来事に変えたり、「確認する予定だ」と未来の予定に変えたりしない。

if 節内部の will arrive は、配送トラックが未来に到着するという内容を表している。ただし、この文は配送トラックが正午前に到着すること自体を断定しているわけではない。

また、before noon on Friday は到着時刻の範囲を示している。「金曜日の正午前」という条件を保ち、午後の到着や正午ちょうどの到着と取り違えないようにする。

別の英文でも、if 節を見つけたら、まず主節の動詞が疑問内容を必要としているかを確かめる。次に if 節がその内容を表しているのか、主節の出来事に条件を加えているのかを確認することで、意味に合った読みを選べる。

〈The store manager〉 is checking
S V

〈if the delivery truck will arrive before noon on Friday〉.
O

S “The store manager” / 主節の主語
V “is checking” / 主節の述語 / is checking は現在進行形で、店長が確認していることを表す。
O “if the delivery truck will arrive before noon on Friday” / 主節の目的語 / if 節全体が is checking の目的語となり、金曜日の正午前に配送トラックが到着するかどうかという確認内容を表す。条件節ではない。原文は到着自体を断定していないが、予定の確定状況や関係者の知識状態までは決められない。

The store manager is checking 〈if 〈the delivery truck〉 will arrive
S V

(before noon) (on Friday)〉.
M

S “the delivery truck” / if 節内部の主語
V “will arrive” / if 節内部の述語 / will arrive は未来の到着を表す。arrive はここでは自動詞であり、目的語を取らない。接続詞 if にも節内部の主語や目的語の役割はない。
M “before noon on Friday” / 到着する時 / before noon on Friday は金曜日の正午前を表し、will arrive に結び付く。正午前に到着すること自体を断定してはいない。

4

a. if 節の役割と判断根拠

指定された If the wind gets stronger this afternoon は、**主節の出来事が成立する条件を表す副詞節**である。

主節は the tour company will cancel the boat trip for safety reasons である。the tour company が主語、will cancel が述語で、the boat trip が中止する対象を表している。

この主節に対し、指定された if 節は「今日の午後に風が強まる」という条件を加えている。つまり、風が強まった場合には、運航会社が安全上の理由で遊覧船を中止するという関係である。

節の内部では、the wind が主語、gets stronger が述語のまとまりである。gets は「〜になる」という意味で、stronger が風の状態の変化を表している。this afternoon は、その変化が起こる時を示している。

if は条件を導く接続詞であり、それ自体が節内部の主語や目的語になるわけではない。

この英文では、主節の will cancel が「遊覧船を中止する」という内容をすでに持っている。if 節は中止する対象を表す目的語ではなく、**どのような場合に中止するのか**を示している。

また、this afternoon は未来の時間を指しているが、条件節の動詞には gets という現在形が使われている。これは未来のことを表す条件の副詞節で、通常、現在形を用いるという既習の規則に合っている。

ただし、現在形という特徴だけで条件節と判断するのではない。主節との意味関係を確かめることが、判断の根拠となる。

b. 全文和訳

直訳
もし今日の午後に風がさらに強くなるなら、そのツアー会社は安全上の理由で遊覧船を中止するだろう。

満点の訳
今日の午後、風がさらに強まれば、運航会社は安全上の理由で遊覧船を中止するだろう。

訳し方の解説
この英文では、if 節が主節の出来事に対する条件を表している。そのため、「風が強まれば、遊覧船を中止する」という条件と結果の関係を保って訳す。

gets stronger は、文脈上の比較基準となる状態よりも風が強くなるという変化を示している。「風が強い」という状態だけに置き換えると、強まるという意味が失われるため注意が必要だ。

主節の will cancel は、条件が満たされた場合の未来の行動を表している。原文は、運航会社がすでに遊覧船を中止したことや、風が実際に強まることを断定していない。「風が強まったので中止した」と既成事実に変えてはいけない。

for safety reasons は、運航会社が遊覧船を中止する理由を表している。「安全上の理由で」という意味を保ち、事故がすでに発生したなどの情報を付け加えない。

また、the boat trip は中止の対象である。運航会社そのものが中止になるわけではないため、行動する主体と中止する対象を正確に対応させる。

別の英文でも、if 節が主節に条件を加えていると判断したら、条件が成立した場合に何が起こるのかを確認する。そのうえで、条件の時点と主節の時制・法を読み取り、**条件付きの未来の内容を確定した事実に変えずに訳す**ことが重要だ。

(If the wind gets stronger this afternoon) (M), 〈the tour company〉 (S) will cancel (V)

〈the boat trip〉 (O) (for 〈safety reasons〉) (M).

M “If the wind gets stronger this afternoon” / 主節にかかる条件節 / if 節全体が遊覧船を中止する条件を表す。風が実際に強まることや、中止が実行されたことは原文では断定されていない。
S “the tour company” / 主節の主語
V “will cancel” / 主節の述語 / will cancel は条件が満たされた場合の未来の中止を表す。
O “the boat trip” / 中止する対象 / the boat trip が will cancel の目的語となる。
M “for safety reasons” / 中止する理由 / for safety reasons は安全上の理由を表す。事故がすでに発生したことまでは意味しない。

(If 〈the wind〉 (S) gets (V) stronger (C) (this afternoon) (M)), the tour company will cancel the boat trip for safety reasons.

S “the wind” / if 節内部の主語
V “gets” / if 節内部の動詞 / gets は状態の変化を表す動詞。未来の条件を現在形で表しているが、条件節という判断は主節との意味関係に基づく。
C “stronger” / 変化後の状態を表す補語 / stronger は the wind の状態を表す比較級。比較基準は文脈上の状態であり、必ず発話時の現在とは限らない。
M “this afternoon” / 風が強まる時 / this afternoon は状態の変化が起こる時を示す。変化の実現を断定するものではない。

5

a. what 節の役割と判断根拠

指定された what the volunteers collected along the beach last Saturday は、**主節の動詞 asked の目的語として働き、疑問の内容を表す名詞節**である。

まず、主節では Sara が主語、asked が動詞である。During the interview は、サラが質問した場面を示している。

asked は、この文では「尋ねた」という意味で使われている。そのため、後ろに続く what 節は、サラが何を尋ねたのかという疑問の内容を表している。

次に、what 節の内部を見ると、the volunteers が主語、collected が動詞である。collected はここでは「〜を集めた」という意味で、集めた対象を目的語として取る。

この目的語に当たるのが what 自身である。along the beach は集めた場所、last Saturday は集めた時を表している。

つまり、**what 節全体は asked の目的語であり、what 自身は節内部の collected の目的語に当たる**。

ここで重要なのは、what が節内部で目的語の役割を担うという事実だけでは、疑問の what か、先行詞を含む関係代名詞 what かを区別できないという点だ。

今回の場面では、サラは海岸清掃活動について記事を書くため、参加者に取材している。主節の asked も質問する行為を表しているため、「ボランティアたちが何を集めたのか」という疑問内容として読むのが自然である。

したがって、指定された what 節は、先行詞を含む関係代名詞 what による「集めたもの」という読みではなく、**「何を集めたのか」という疑問内容を表す名詞節**と判断する。

ただし、what 節の内部構造だけでこの区別が決まるわけではない。判断には、主節の動詞の意味と取材という文脈の両方を用いている。

b. 全文和訳

直訳
インタビューの間に、サラは、ボランティアたちが先週の土曜日に海岸に沿って何を集めたのかを尋ねた。

満点の訳
取材中、サラはボランティアたちが先週の土曜日に海岸沿いで何を集めたのかを尋ねた。

訳し方の解説
主節の asked は過去形なので、サラが尋ねたという行為は過去の出来事である。また、what 節内部の collected も過去形であり、疑問内容の中で、ボランティアたちが先週の土曜日に何を集めたのかを表している。何かを集めたことを前提にした自然な質問だが、収集の事実そのものを主節が独立に断定・保証しているわけではない。

last Saturday は、what 節内部の collected に結び付いている。そのため、「先週の土曜日に集めた」と訳す。サラがインタビューを行った日まで先週の土曜日だったと断定してはいけない。

During the interview は、サラが質問した場面を示している。「インタビューの間に」を「取材中」と整えることで、原文の意味を保ちながら自然な日本語にできる。

また、what 節は「何を集めたのか」という疑問内容を表している。記事を書くための取材という文脈に合っており、質問した時点で何が集められたかをサラが知っていたとは限らない。

原文には、集めたものの種類や数量は書かれていない。海岸清掃という場面からごみを想像することはできるが、「ペットボトルを何本集めたのか」など、具体的な種類や数量を補ってはいけない。

別の英文でも、what 節を見つけたら、まず節全体が主節のどの要素になっているかを確認する。次に what 自身の節内部での役割を調べ、最後に主節の動詞と文脈から、疑問内容なのか「〜するもの・こと」なのかを判断する。

特に、**節内部で目的語に当たる要素がないように見えることだけを、先行詞を含む what の決定的な根拠にしない**ことが重要だ。

(During 〈the interview〉) (M), Sara (S) asked (V)

〈what the volunteers collected along the beach last Saturday〉 (O).

M “During the interview” / 質問した場面 / During the interview は Sara が質問した場面を表す。取材日が先週の土曜日だったとは断定しない。
S “Sara” / 主節の主語
V “asked” / 主節の動詞 / asked は過去形で、サラが尋ねたことを表す。
O “what the volunteers collected along the beach last Saturday” / 主節の目的語 / what 節全体が asked の目的語となる。取材場面と asked の意味から、ここでは「何を集めたのか」という疑問内容として読む。収集の事実そのものを主節が独立に保証しているわけではない。

During the interview, Sara asked 〈what (O) 〈the volunteers〉 (S) collected (V)

(along 〈the beach〉) (M) (last Saturday)〉 (M).

O “what” / what 節内部の目的語 / what は collected の目的語に当たる。ここでは取材場面と asked から疑問内容として読むが、先行詞を含む what も内部で目的語になり得るため、構造だけで区別しない。
S “the volunteers” / what 節内部の主語
V “collected” / what 節内部の動詞 / collected は過去形で、疑問内容の中の過去の収集を表す。具体的な収集物の種類や数量は示されていない。
M “along the beach” / 収集した場所 / along the beach は collected に結び付き、海岸沿いでの収集を表す。
M “last Saturday” / 収集した時 / last Saturday は collected に結び付き、先週の土曜日を表す。主節の質問が行われた日まで指定するものではない。

6

a. what 節の役割と判断根拠

指定された what her classmates painted は、**主節の動詞 displayed の目的語として働く名詞節**である。この文では、先行詞を含む関係代名詞 what によって「クラスメートたちが描いたもの」を表している。

まず、主節の中心は Rina displayed である。Rina が主語、displayed が動詞で、「リナが展示した」という過去の出来事を述べている。

displayed は、この文では「〜を展示した」という意味であり、展示した対象を目的語として取る。その対象に当たるのが what her classmates painted という節全体である。

次に、what 節の内部を確認する。her classmates が主語、painted が動詞である。painted は、この場面では「〜を描いた」という意味で使われており、what が描いた対象、つまり目的語に当たる。

したがって、**what 節全体は displayed の目的語であり、what 自身は painted の目的語に当たる**。節全体の外側での働きと、what 自身の内部での役割を分けて捉える必要がある。

また、関係代名詞 what は先行詞の意味を自身に含んでいる。そのため、原文に別の先行詞がなくても、「クラスメートたちが描いたもの」という名詞のまとまりを作れる。

今回の場面では、リナが文化祭でクラスメートの作品展示を担当している。displayed という動詞も、展示する対象を表しているため、what 節を実際に描かれた作品を指す「〜したもの」と読むのが自然である。

一方、疑問内容を表す what も、節内部で目的語の役割を持つことがある。したがって、painted の後ろに目的語がないように見えるという理由だけで、関係代名詞 what と決めることはできない。

この英文では、**展示する対象を表すという主節との意味関係と、作品展示という文脈**が、先行詞を含む what の読みを支えている。

b. 全文和訳

直訳
文化祭で、リナは、彼女のクラスメートたちが描いたものを展示した。

満点の訳
リナは文化祭で、クラスメートたちが描いた絵を展示した。

訳し方の解説
主節の displayed は過去形なので、リナが展示したという行為は過去の出来事である。また、what 節内部の painted も過去形であり、クラスメートたちが描いたという出来事を表している。

what her classmates painted は「彼女のクラスメートたちが描いたもの」という一まとまりで、displayed の目的語になっている。

今回の場面は文化祭の作品展示であるため、painted を「絵を描いた」という意味で捉え、what 節全体を「クラスメートたちが描いた絵」と訳すのが自然である。

ただし、paint には「絵を描く」だけでなく「塗料を塗る」という意味もある。どの英文でも必ず絵を描く意味になるわけではなく、今回の読みは作品展示という文脈に基づいている。

また、her はこの場面ではリナを指すと読むのが自然である。そのため、満点の訳では「クラスメートたち」として、リナとの関係が文脈から分かる形に整えている。ただし、別の女性が話題になっている文脈なら、その女性のクラスメートを指す読みも成立し得る。

原文からは、展示された絵の具体的な種類、画材、作品数までは分からない。「水彩画を 3 枚展示した」など、示されていない情報を付け加えないようにする。

At the school festival は、展示が行われた場面を表している。「文化祭で」という情報を保ちながら、自然な日本語の語順に整えればよい。

別の英文でも、what 節を読む際には、まず節全体が主節で果たす役割を確認し、次に what 自身の節内部での役割を調べる。

そのうえで、主節の動詞が求める意味と前後の文脈を照合する。今回のように展示する対象が問題となる場面では「〜するもの・こと」という読みが自然だが、**文脈によって複数の解釈が成立する場合は、構造だけで一方を排除しない**ことが大切だ。

(At 〈the school festival〉), Rina displayed 〈what her classmates painted〉.
M　S　V　O

M “At the school festival” / 展示した場面 / At the school festival は Rina が作品を展示した場面を表す。
S “Rina” / 主節の主語
V “displayed” / 主節の動詞 / displayed は過去形で、リナが展示したことを表す。
O “what her classmates painted” / 主節の目的語 / what 節全体が displayed の目的語となる。文化祭での作品展示という文脈と displayed の意味から、ここでは「クラスメートたちが描いたもの」と読む。作品の種類・材料・数量は示されていない。

At the school festival, Rina displayed 〈what 〈her classmates〉 painted〉.
O　S　V

O “what” / what 節内部の目的語 / what は painted の目的語に当たる。ここでは描いたものを表し、外側に別の先行詞はない。疑問内容の what も目的語になり得るため、内部構造だけでは読みを決められない。
S “her classmates” / what 節内部の主語 / her は本文では Rina を指すと読むが、別の女性を指す可能性も文脈次第で残る。
V “painted” / what 節内部の動詞 / painted は過去形。作品展示という文脈から「描いた」と読むが、別の文脈では「塗った」という意味にもなる。